墓のあれ
れ
富永石材　検索
㈲富永石材
明石市樽屋町10-4 ☎911-6233

三田・阪神

「当時の記憶伝えたい」

三田・関学大で震災復興フォーラム

研究者6人が振り返る

阪神大震災20年

阪神大震災当時に学生だった研究者らが発表したフォーラム＝三田市学園2の関西学院大で

阪神大震災の発生当時、関西学院大理学部（現理工学部）の学部生や院生だった研究者らが、当時を振り返りながら現在の研究について発表する「震災復興関学化学フォーラム　あれからもう20年」が24日、三田市学園2の関西学院大学神戸三田キャンパスであった。大学や企業、研究機関で活躍する6人が発表し、後輩の学生ら約100人が聴き入った。

学部2年生だった盛田伸一・東北大准教授は「阪神と東日本の二つの震災が、自分の進むべき道を決めたのではないか」と語り、化学から物理、生物学へと広がる自身の研究を紹介した。

和歌山県工業技術センターの森一主任研究員は当時、大学院2年生だった。地滑りで住民34人が犠牲になった西宮市仁川百合野町で下宿。「外に出ると、あるはずのものがなかった」。友人の安否確認に走り、近所の住民とバケツリレーで火を消した。避難所で寒さに震えた。「自分一人では何もできない。人の絆は本当に大事」と学生に語りかけた。

当時、理学部は西宮上ケ原キャンパスにあった。可燃性の薬品が倒れ、1階の研究室から出火した。別の研究室で泊まり込み、修士論文を仕上げていた西井良典・信州大准教授は、他の学生と一緒に学内あちこちから消火器約40本をかき集め、消し止めた。「ダメかなと思うことがあっても、震災で生き残った意味を考え、一歩ずつ進んでいる」と語った。

同フォーラムを企画した関学大の田辺陽教授は「あの時に学生だった人たちは今、研究者として脂がのりきっている。後輩たちに当時の記憶を伝えるとともに、研究紹介で大学を盛り上げたい」と話した。

【粟飯原浩】